

機 関 名	東北大学、スタンフォード大学貧困と不平等研究センター		
拠点のプログラム名称	社会階層と不平等教育研究拠点の世界的展開		
中核となる専攻等名	文学研究科人間科学専攻		
事業推進担当者	(拠点リーダー) 佐藤 嘉倫 教授		外 18 名
<p>〔拠点形成の目的〕</p> <p>本拠点の目的は、その前身である21世紀COEプログラムにおける教育研究活動とわが国における社会階層研究の蓄積を基盤にして、格差問題を中心にした社会階層と不平等の教育研究を世界的に展開することである。近年、社会問題となっている格差問題をめぐっては、(1)格差の実態を解明する実証問題、(2)格差を生み出すメカニズムを解明する理論問題、(3)格差がもたらす社会的影響を解明し、政策提言を視野に入れた帰結問題、という3つの問題群がある。これらの問題群に学際的・融合的に取り組むために、「社会階層と不平等の構造と変動」、「東アジア」、「マイノリティ」、「公正」、「国際移動」という5つの研究部門を設置し研究を推進する。また拠点全体のワークショップや国際シンポジウムによって研究部門間の有機的連携を実現する。さらに、連携機関であるスタンフォード大学貧困と不平等研究センターとの貧困の国際比較プロジェクトを立ち上げる。</p> <p>教育面においては、COEフェロー（ポスドク研究者）を世界的公募により、COE大学院生を学内公募により採用する。採用された若手研究者に対して、「社会階層と不平等教育研究拠点」コース、正副アドバイザーによる複眼的指導、COE助教によるきめ細かい研究指導、ワークショップにおける英語での報告、国際学術交流協定を活用した留学の奨励、国際シンポジウム開催の奨励、自立した研究を推進するためのCOE特別研究奨励費支給、リサーチアシスタント雇用による経済的保障、スタンフォード大学貧困と不平等研究センターと共催するサマースクールへの参加、などの教育プログラムを提供し、それらを通じて「世界で活躍する、タフで独創的な人材」を輩出することを目指す。</p> <p>〔拠点形成計画及び進捗状況の概要〕</p> <ul style="list-style-type: none"> ・ 拠点の運営体制 本拠点は、拠点統括オフィス、COE人材育成オフィス、COE研究推進オフィスという、3つの運営組織によって教育研究プログラムを推進していく。拠点統括オフィスはCOE人材育成オフィス・メンバーとCOE研究推進オフィス・メンバーからなり、拠点の基本的方針を決定する。COE人材育成オフィスは、オフィス長と3名の事業推進担当者、COE大学院生・COEフェローの代表者からなり、教育プログラムの作成や改定を行う。COE研究推進オフィスは、オフィス長と各研究部門長からなり、各研究部門の進捗状況をチェックし、部門間の有機的連携を促進する。 ・ 拠点の教育活動 世界で活躍する、タフで独創的な人材を育成するためには、独創的な研究を自立した環境で推進し、その研究成果を国際的に発信する力を養成する必要がある。上述した教育プログラムはこのことの実現を目的としている。特に、英語によるワークショップでの報告と国際シンポジウムのオーガナイズは、COEフェロー・COE大学院生にとって大きな負担ではあるが、世界の同世代の若手研究者に負けないだけの能力を養う機会となる。またスタンフォード大学貧困と不平等研究センターと共催するサマースクールでは、両機関の教員が最先端の研究を報告するだけでなく、大学院生が自分の博士論文研究プロジェクトの報告をする。シンポジウムや国際会議とは異なり、時間的にも精神的にも余裕のある雰囲気の中で議論をすることで、優れた博士論文の執筆につながるだけでなく、将来の知的ネットワーク形成の基盤ともなりうる。 ・ 拠点の研究活動 本拠点の特徴は、多彩な人材を世界から集結して、その集積効果により、社会階層、不平等、格差の問題に取り組むことにある。このために、拠点メンバーを上述の5つの研究部門に配置し、多面的に格差の問題群の解明に取り組む。また拠点全体のワークショップを定期的に行うことで、研究部門間の有機的連携を促進する。スタンフォード大学貧困と不平等研究センターとは貧困の国際比較プロジェクトを共同で実施し、日本の格差問題を国際的に位置づける。 ・ 拠点の評価体制 社会階層と不平等研究の第一人者からなる外部評価委員会を設置し、外部評価を実施する。また、文学研究科評価分析室が、本プログラムとは独立した内部評価を行う。拠点内部では、拠点統括オフィスが自己点検を行い、COE人材育成オフィスはCOE大学院生・COEフェローの研究進捗状況をチェックする。このような評価体制により、必要に応じて本拠点の教育研究活動の方向を修正していく。 ・ 進捗状況 本拠点における教育研究活動は予算制約のため当初計画よりも規模を縮小したが、実質的にはおおむね計画通りに進捗している。とりわけ、教育活動ではサマースクールや国際シンポジウム等の国際的活動に積極的に関わることにより、若手研究者が自信を持って世界の同世代の研究者と交流し、研究成果を国際会議等で発表するようになった。また研究面では、格差をめぐる3つの問題群に対する理解が深まり、拠点メンバーが著書・論文等でその成果を公表するとともに、拠点として英文叢書の刊行を開始し、研究成果を世界に発信している。 			

(総括評価)

当初目的を達成するには、助言等を考慮し、一層の努力が必要と判断される。

(コメント)

大学の将来構想と組織的な支援については、事業推進担当者の業務専念、総長裁量経費の支出、全学的な教育研究連携体制の構築、事務支援スタッフの配置など、大学として、本拠点形成のための支援体制については相当の努力が払われており、評価できる。大学の将来構想全体の中で本拠点がいかなる地位を占めるかについては、より明確にしていくことが期待される。

拠点形成全体については、海外教育研究機関との連携も含め、本拠点の運営は概ね適切に行われているものと評価できるが、東アジアにおけるハブ拠点形成については、一層の努力が求められる。

人材育成面については、英語による研究報告や論文執筆、国際シンポジウムの開催、サマースクールへの参加など若手研究者の育成に多くの努力が払われており、評価できる。今後は、博士号取得者数及び査読付きの海外学術誌での論文掲載件数の増加について、一層の努力が期待される。

研究活動面については、諸外国に例を見ない独創的な研究アプローチという点では、今後の掘り下げが必要とされている。特に、新たな学術的知見の蓄積という点では、一層の努力が望まれる。

補助金の適切かつ効果的使用については、概ね適切に行われている。

採択時の留意事項への対応については、いかなる格差がいかなる意味で問題であり、いかに解決あるいは緩和していくべきかについて、一層の理論的検討が求められる。

今後の展望については、若手研究者の育成及び研究活動での一層の努力を踏まえて、本拠点形成の当初目的が達成されることが期待される。